

ちょっと久しぶりの白山

20期 深田 進

この時期（ゴールデンウィーク）は山仲間との山行がすっかり恒例になっている。16年前に19期の梅さんから笈ヶ岳に登ろうという話があり、就職して以来遠ざかっていた山に再び足を運ぶきっかけとなった。山仲間のメンバーは19期の梅さん、20期の栃尾、久富、松下、深田、21期の梅夫人（旧姓瀬戸）などワングルのOBが中心になっている。松下君とは最近ご無沙汰しているが、7年前まではわざわざ鎌倉から駆けつけてくれたものだ。白山近辺を主に登ってきて、これまでに笈ヶ岳は色々の方向から5回登っている。最近では県外の山にも行くようになり、尾瀬、越後駒ヶ岳、中の岳と続いたので、今年は久しぶりに白山へ行くことになった。

コースは2泊3日で

- ①一里野温泉スキー場———奥長倉小屋———七倉山———小桜平小屋———新岩間温泉
- ②一里野温泉スキー場———奥長倉小屋———大汝山———ゴマ平小屋———中宮温泉

の2コースを考えていたが、②は机上登山の段階でかなり無謀な計画とわかり、いちおうメンバーの調子がよほどよければという可能性を残して出発することにした。

白山へは高校2年の6月に登って以来かなりの回数になり、初めの頃は登った回数を数えては一人自己満足に浸っていたのだが、10回、20回と登り、登山の形態が異常になるにつれて、どこまでが白山登山なのかわからなくなり、数えるのをやめてしまった。当初、白山に登るということは最高峰の御前峰に登ることを意味していた。が、山は高きが故に尊からずということで、大汝、七倉、四塚などの主峰群はいいとしても別山、三の峰、釈迦岳はどうなるの？まして、丸石谷を遡って百四丈の滝を越え清浄が原のネマガリタケの中をさまよって帰ってくるというのは？

それほど行っていると思っていた白山だが、積雪期のこのコースはほとんどのメンバーが初めてで、昭文社の山と高原の地図「白山」の執筆者である梅さんでさえ雪の小桜平やゴマ平は行ったことがないと言っていた。というわけで、今回欲しかった情報を整理すると、

- ①山小屋の状態：今年は特に雪が多かったので小屋が埋まっていて入れないことも考えられた。また逆にどの程度の人出なのかわからないので、小屋が満員の場合に備えてテントが必要か否か。
- ②頂上部の雪面の状態：大汝からお花松原への下りなどでアイゼンが必要か否か。
- ③美女坂の状態：標高はともかく急峻なので雪の付き方次第ではかなり危険な場合も考えられた。

結局アイゼンは持っていったが、テントは持っていかなかった。そして実際に必要だったのはアイゼンではなくて、テントだった。万一小屋が満員なら座ってでも寝ればよいという安易な気持ちからで、雪に埋まっている心配は実は出発してから思いついたものだ。初日はスキー場の上を出発した時から雪の上を歩き、奥長倉の小屋は冬期の出入り口がちょうど雪面の高さにあってすんなりと入ることができた。客は自分たちだけ。昼や毛布もあって快適に過ごすことができた。しかし細い尾根の上のこの小屋でさえ頭が少し出ている

程度である。小桜平はどうなっているだろうか。今頃心配しても遅いのだが、小屋が埋まっていたらそのまま下りてしまうしかないということで落ち着いた。この時点でゴマ平回りはほとんど諦めた。小桜なら下りる元気はあるけれどゴマが埋まっていたらシャレにならない。

2日目、小屋を出ると美女坂が険悪に聳えている。左の丸石谷側は絶壁なので右の目附谷側の斜面を絡みながら登る。雪の多いのが幸いしてルートは楽に取ることができた。右の斜面も急激に目附谷に落ちていっているのも固ければ怖いところだ。念のためアイゼンを付けている者もいたが、十分に柔らかかった。美女坂の上から四塚山までは野球ができるほど広い雪原を勝手気ままに歩いた。上から5、6人のスキーのパーティーが滑り降りてきた。四塚山を登り切ったときはかなり消耗していて②案はやはり無謀だと思った。七倉山を従えて聳える大汝峰は畏敬の念を覚えるほど立派だった。今回の最高地点七倉山から飽きるほど大汝峰を眺めてから、きびすを返して下りにかかる。2週間前くらいに下で降った冷たい雨が山では雪だったようで、例年より雪が柔らかいうえに日差しですっきりくさった雪面はワカンが要るくらい足が潜った。梅夫人などは首まで潜っていた。アイゼンは結局使うことはなかった。下りでは皆すっかり元気になり、小桜平に向かって我先にと下っていった。

小桜平の手前の樫が丘の辺りから双眼鏡で小屋を探す、それらしい物は見あたらない。自分自身学生時代以来来っていないので、小屋が平のどの辺にあったか全然覚えていない。頼りの梅さんも栃尾もはっきりしない。地形図の小屋の位置を頼りに、三段になった平をくまなく探したけれどわからず仕舞い。「小屋の位置くらい柱を立ててわかるようにしとけよ」と捨てぜりふをはいて即下りにかかった。テントを張れば最高のロケーションだった。不幸中の幸いは雪が多くて登山口までほとんど足下を気にせずに行けることができたことだ。結局この日の行動時間は11時間32分。閉鎖されている山崎旅館の倉庫を借りて、一夜のしとねを確保した。

登山データ

平成12年5月4日～6日

メンバー：梅（19期）、栃尾、深田（以上20期）、梅（21期）、竹田 以上5名
行動記録

4日 金沢===一里野温泉スキー場===ゴンドラ山頂駅---奥長倉小屋

8:00 9:20 9:45 9:55 9:55 14:50

5日 奥長倉小屋---美女坂上---天池---四塚山---七倉山---

6:28 7:45 8:18 8:40 11:28 12:07 12:20

小桜平---登山口---山崎旅館

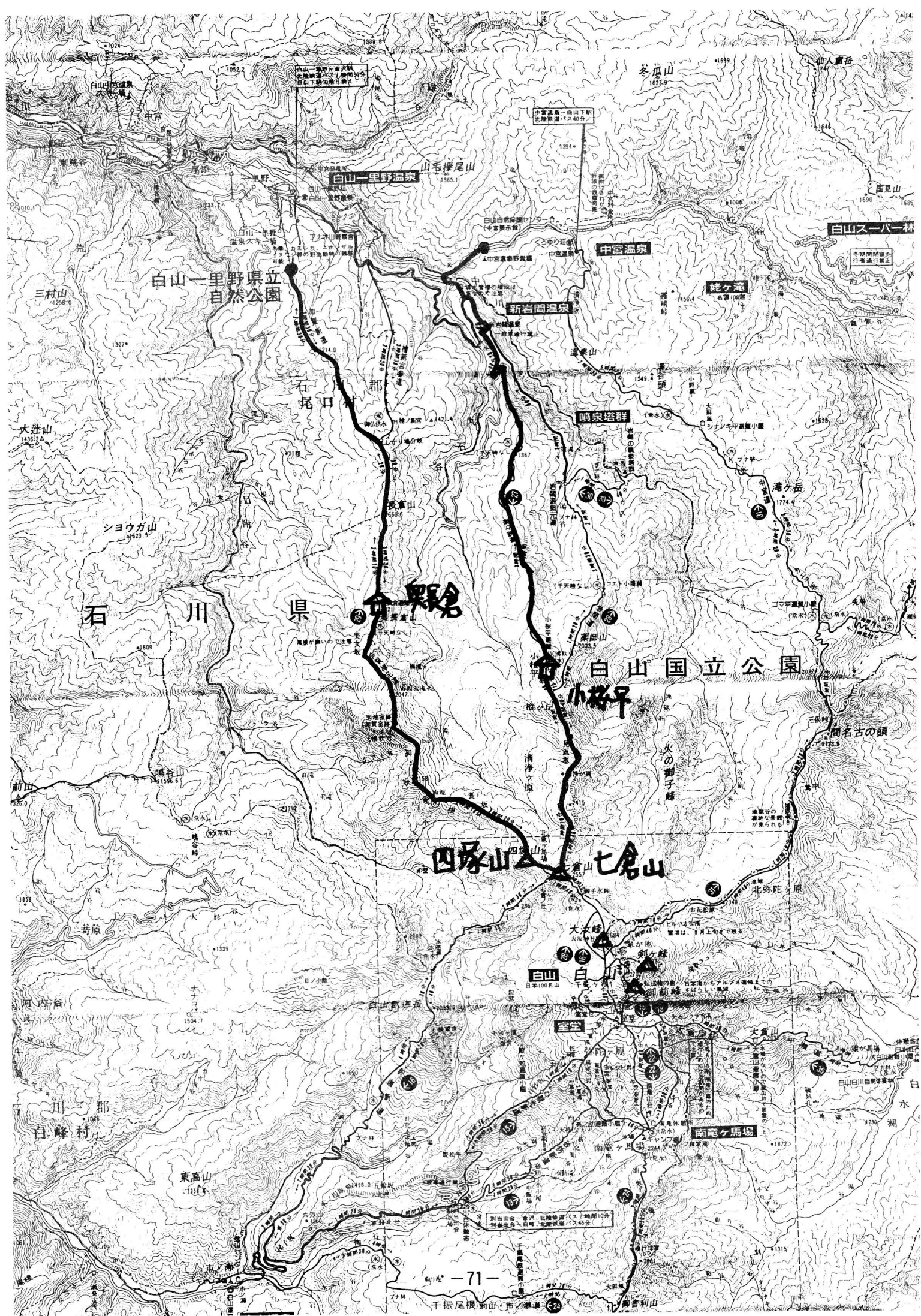
15:00 17:35 18:00

6日 山崎旅館---鉄管路上---中宮レストハウス===中宮温泉===金沢

7:55 8:10 8:47

*スキー場と中宮レストハウスに車をとめる。

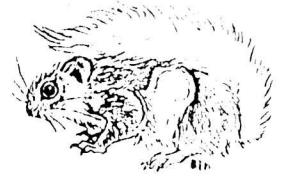
*早朝でも中宮温泉のくろゆり荘には入浴できた。



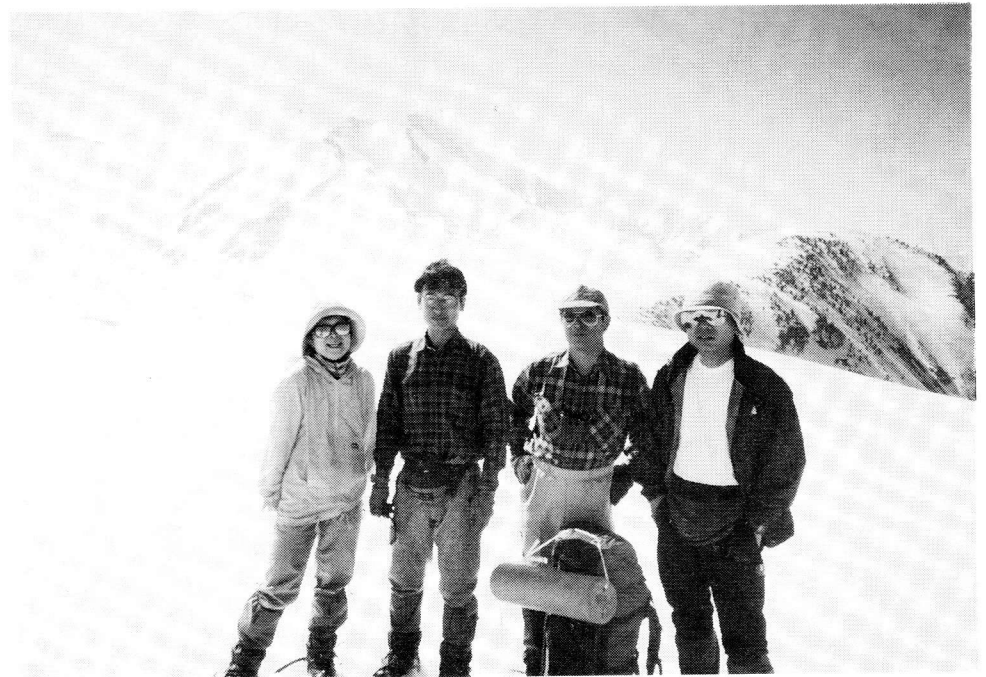


【奥長倉小屋】

栃尾（20期）竹田 深田（20期）梅（19期）

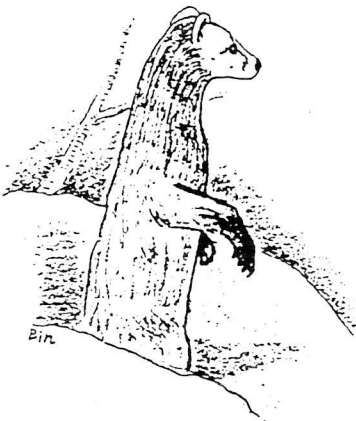


モモンガ



【天池付近からの白山】

梅（21期）竹田 深田（20期）栃尾（20期）



テン

山便り

10期 木津 治男

2000/06/07

6月4日(日) 僧ヶ岳へ登ってきました。最高の日和で、気持ちのいい登山を久しぶりに満喫してきました。

*

奥名さんの数々のメールに煽られたというわけではないのですが、小生の登山への気持ちをずっと繋いでいただいたという点では大いに感謝しております。

*

小生のかみさんが(のり子という名前です)、3人の子供達に手が掛からなくなり、休日の過ごし方にも変化が出始めたこの5月のことでした。近所の山好きの奥さんに誘われ、「ちょっと山に行つて来る。」と言って、いきなりゴム長に手っ甲もどきのスッパツ代用品を持って、金剛堂山に登ってきました。

この、元ワングルの亭主を差し置いてと、思いましたが、結婚前に長崎から北アルプス槍穂縦走をガイドして以来、その後富山へ帰って18年になりますが、子供達がまだ幼少の頃には遊園地代わりに、医王山、牛岳、白木峰、薬師岳へ連れていったきりでした。

この10数年登山らしいものからは一切遠ざかっていた、ぐうたら亭主の沽券(一応、元山岳部~ワンダラー)というものは、元よりとおの昔に雲散霧消してしまっております。

*

6月に入って、また、件の町内の奥さんに誘われたらしく、「今度の日曜日僧ヶ岳へ登ってみない?」とかみさんから誘われました。このところ心の臓の病かと思われるほど動悸・息切れが自覚症状となってきた小生としては、健康診断代わりにこの誘いに乗ることにしました。ジョギングどころか散歩もせず、完璧なパソコンおたくの10年を過ごしてきた50男にいきなり僧ヶ岳は殆ど自殺行為にも思えたものです。しかし、この機会を逃がしては一生登山とは縁が切れるような気がしての一大決心でした。しかも、僧ヶ岳は初めてでしたので、地図や磁石や山の道具をと家捜し始めた亭主に向かい、かみさんの一言、「あなた、カメラ一つでいいわよ」でした。

リーダー役の近所の奥さんはこの2~3年身体の健康とかで山登りを始められたわけですが、こちら二人の息子さんを社会に送り出して、ご亭主と二人でアウトドアを始められたわけで

す。これも、奥さんがかつてにフィーバーで、体力的限界のご亭主を置いて、さる登山グループに入り、かなりの登山経験を積まれたらしいのです。「もう僧ヶ岳には何回も登っているから大丈夫、帰り道の温泉を楽しみに付いてこられ」というわけです。

*

日曜日早朝、コンビニに立ち寄り、おにぎりと、500mlのペットボトル数本(一人3本ずつ)を調達し、魚津一片貝川上流の登山口を目指しました。コースタイムは次の通り。

*

7:35 東又登山口出発、初めからすごい登り、いっきに直登で小生の心臓はバクバクいい呼吸はふーふーだった。生まれて初めて「ふーふー」を経験した。息が切れた状態を、「ふーふー言う」と表現する事は知識では知っていたが、初めて体験した。学生時代はどんなきつい登山でも呼吸はつねに「はーはー」であった。これが、30分間のワンピッチの間ずっと口先をまるめて「ふーふー」であったのだ。どうしても、口を大きく開けて「はーはー」という呼吸が出来なかった。何故だか解らないが、2ピッチ目以降は「はーはー」という息が出来た。

そして、1時間も歩き稜線に取っつくころには残雪も目立ち始め雪上を歩き出すと、身体はもう宙を走っていたようだ。それまで、二人のご婦人のお尻ばかりパチパチ撮影していたのが、雪になったら急に走り出していた。そして、初めて前に先回りして撮ることが出来た。

9:50 前衛峰の成谷山(1600m)にとりつく

10:50 僧ヶ岳頂上

13:30 登山口へ無事下山

背景の山は、毛勝岳、花々は、いわかがみ・いわうちわ・かたくり・たむしば・しらねあおい等同行のご婦人方は、2dバックにデイバック、そして小生はハーフデイバックに愛用のK1SSと標準と望遠ズームを2本、それとレーンスーツのみの軽装備でありました。撮影タイムなしなので、花々を撮るときはちょっと苦しかった、三脚無しの接写なのでまるで、パイアスロン競技をやっているようなものでした。一応、ご一行様は人様にお見せするようなものではないのですが、僧ヶ岳頂上のスナップをお見せします。左が小生、中央がわが妻、のり子、右がリーダーのあつ子さん、の3名でした。久しぶりのきつい登山でしたが、気分良く登山の醍醐味を満喫できた僧ヶ岳ではありました。



山便り

FROM: KENAOYAGI@aol.com

11期 青柳 健二

SUB: 尾瀬で水芭蕉ウォッチング
青柳です。

突然思い立って、水芭蕉の尾瀬へ行ってきた。
9日の金曜に休みがとれて、9-10日の一泊二日。

ところが、梅雨入りと重なって、雨の出発。
予約があるし、サラリーマンの山行きのつらさで強行。

トレーニングの意味も込めたので、福島の御池側から
尾瀬ガ原へ入った。
これが失敗なのか成功なのか、残雪一杯の中を雨に
濡れて歩くことになった。

今年は、春にタツプリ雪がふり、例年より2週間遅れで、
水芭蕉の盛期だった。
温泉小屋付近から、水芭蕉が迎えてくれた。
雨の中、霧に霞んだ水辺に咲く水芭蕉。
正に「水の妖精」の名のとおり、幻想的風景に、
疲れが吹っ飛んだ。

東電小屋に泊まる。
そんなに混んでいなかったのに、しっかり
8畳間に8人詰め込まれ寝させられた。
山小屋は、1畳1人のルールを守ることが
サービスと心得ているのだろう。



10日は、曇り。尾瀬ヶ原を水芭蕉ウォッチング。
下田代、中田代、見晴、とほぼ半周。
カッコウ、ウグイス、ホウアカ、その他モロモロの
鳥たちの合唱を聞き、カメラと双眼鏡をぶら下げ、
人の2倍の時をかけて、尾瀬を楽しんだ。
惜しむらくは、至仏岳と燧9岳が全容を見せて
くれなかったこと。

水芭蕉、ザゼンソウ、リュウキンカ、ショウジョウバカマ、
ヒメイチゲ、ミヤマスマレ、ワタズ9の可憐な花々と
ミネサクラ、タムシバ、オオカメノキ、そしてアズマシャクナゲ、
ムラサキヤシオツツジの鮮やかな色合い。
ブナと白樺の新緑の中、たっぷりの花巡りだった。



帰りは、平滑の滝と三条の滝を巡って御池に戻った。
尾瀬の水を一気に100M落とす、三条の滝は、その
水量の多さに迫力満点。
滝の展望台までの急斜面の下降で、高所恐怖症の病を
浮かび上がらせたご褒美としても大満足できるものだった。

車の単独行の最大の弱点は、山から降りても、達成感と
疲労をいやす、最良の飲料ビールが飲めないこと。
上半身だけ着替えて疲れた体にムチ打って、それから
たっぷり5時間かけて自宅まで戻ったのだった。

デジカメ、スキャナがないので、折角の写真もお見せできません。
絵葉書みたいに、青空と明るい山容の元での水芭蕉は見れなかった
が、またの楽しみを残しての山歩きとなった。
次は、梅雨入り前に、水芭蕉の満開となる年に行こう。

さて、8月の白山に向けてのトレーニングは成果があった。
濡れた木道の上でシッカリ転んで、ひざを擦りむき、バランス
の大切さも再確認。
7月にもう一山どこか登って、また絶好調で入りますから、
宜しく。

2000. 6. 11

花の写真集で、花の名前を覚えながら。

KUWV11 青柳でした。

山便り

100m級低山紀行 15期 奥名 正啓

猿山 標高 333m

猿山は能登半島門前にあり、山よりもその断崖絶壁のほうが遙かに景観としては素晴らしい。能登の山は総じて高い山はないものの、あまり人の垢にまみれていないせいか少し山にはいっただけで、かなり山奥へ入り込んだ気分がする。富来町のヤセの断崖や能登金剛にくらべると、はるかに人の気配の少ない孤絶した地域である。

右写真の三角点には頂上の標識が倒れている。そこには353mとかかかっているように見える。左絵には332m。そのほかのガイドブックには333mなどとなっている。いづれにしても大差はない。この三角点は道沿いではなく、少しばかりヤブのなかに踏み込まなくてはならない。そこまで行っても見晴らしがよいわけではない。

春先に花開く代表的な花。それがキクザキイチゲ（左）と雪割草（右）である。

キクザキイチゲはおおがらでその花の白さもすてきだ。時に薄紫色の花もあり、こちらは高貴な雰囲気が出てなお素晴らしい。

猿山の代表は何と言っても雪割草の群生であろう。この雪割草という名前は春先に真っ先に雪を割って花を付けることから呼ばれているが、本当のユキワリソウ（カタカナで表記しているところに注意）とは全く違う。いわばあだ名のようなもので、正式にはミスミソウあるいはスハマソウと言う。近年甚だしく盗掘にあい、相当数が持ち出された。その際、紫色や赤の濃い色合いのものがとられ、白い花ばかりが残っている。



猿山の断崖絶壁は岩だけではなく、カシワ、エノキ、ケヤキなどの樹木が生えている。しかし、それらは海からの強風にさらされてあまり高くはのびず、盆栽の枝のようにグネグネと枝をひろげている。

深見の部落から急な坂道を登りきったあたりに東屋があり、遠く猿山灯台がのぞめる。振り返って後ろには富来の高爪山が姿の良いシルエットをみせている。

下をのぞくと、高所恐怖症の人は足がすくむほど垂直に近い絶壁である。

